
kiss me

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

k i s s
m e

【Nコード】

N 6 4 1 9 C

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

平×和です。和葉は、亡くなったお母さんが大好きだった。お母さんとの命日に和葉は・・・・？？

『おかあちゃん、チューして』

『いいわよ』

まだ、おかあちゃんが生きていた頃

あたしはおかあちゃんに甘えてばかりいた。

おかあちゃんは、あたしのほっぺにキスをしてくれる。

それがとっても嬉しくってたまらなかった。

とーっても温かかった。

おかあちゃんが死ぬ間際、最後のキスをしてもらった。

その時のキスは、冷たかった……

もし、願いが叶うなら

もう一度キスして下さい。

温かい、温かいキスを。

「なあ、和葉」

「なに?？」

「明日って・・・」おかあちゃんの命日やで!!」

和葉は、平次の言葉を遮るようにそう言った。

そして、笑顔で振り向いてこう言った。

「なあ、平次!! 一緒に来てくれへん?？」

「ん??. ああ、かまへん」

「じゃ、明日の9時に迎えに来てもらってええ?？」

「ああ」

「ゴメンなあ。じゃ、明日な」

平次は分かっていた。

あの元気は空元気。

本当は凄く凄く辛いんだって。

「ふう」

和葉はすぐに制服を脱いだ。

そして、ベッドの上にあるくまのぬいぐるみをギュッと抱きしめる。

このくまのぬいぐるみは、おかあちゃんの温もりがいっぱいつまってるんや。

4歳の頃に、おかあちゃんに買ってもらったぬいぐるみ。

だから一生大事にするって決めた。

パンツ

「和葉!! 明日のことなんやけ・・・」

「キ・・・キャアアア!!」

和葉は、着替えの途中でくまのぬいぐるみを抱きしめていた。

つまり・・・下着姿で。

「平次の変態!! アホ!! 信じられへん!!」

「お前がはよ着替えてればこんなことにならなかったんや!!」

平次は顔を真っ赤にしながら怒鳴り散らした。

平次の頭から、さっきの和葉が離れない。

「・・・で、明日のことなんやけどって?」

「ああ、明日は靴で来てくれ」

「へ?」

「動きやすい格好で来てくれへん?」

「嫌や」

「何でや?」

「おかあちゃんと会えるから、オシャレするつもりやったんやで?」

「頼む!! どうしても和葉に見て欲しい場所があるんや」

「・・・あたしに?」

「ああ!!」

平次は子供のようなあどけない表情で笑った。

この平次の顔にあたしは惚れてしまったのかもしれない。

昔から変わらない。

優しい顔で歯を出して笑う平次の顔が大好きだった。

もちろん、今でも・・・

。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。
。。+☆+。。。。+☆+。。。。+☆+。

「・・・おかあちゃん」

お墓の前でそうつぶやいた。

墓石にゆっくりと水をかけて、花を供える。

おかあちゃん・・・会いたかったで。

あたしは、ゆっくりその場にしゃがみこんだ。

「なあ、おかあちゃん。今ね、あたしめっちゃ幸せやで???だって
な、隣にはいつも大好きな人がいるんだ。寂しいけど、おかあちゃん
のぬいぐるみもあるし・・・大丈夫やでッ・・・ッ・・・」

「和葉・・・」

「だ、だから、だ、大丈夫やで・・・ヒック・・・ヒック」

寂しくないなんて、嘘。

ただの強がりなんだ。

だって、会いたって弱音吐いたら

おかあちゃん、心配してしまう。

「もう一度、おかあちゃんにチューして欲しかったな」

涙でぐしゃぐしゃの顔でそう言う。

和葉は涙を拭いて、立ち上がった。

そして、平次の腕をギュッと掴む。

「ほな、行こう」

「ああ」

平次は、和葉を連れて近くの森の中に入っていった。

少し暗い森の中では、気分も暗くなってしまった。

おかあちゃんは どうして死んでしまったんやろう。

「そろそろやで」

少し足が疲れてきた頃

段々と光が見えてきた。

木々から光が漏れている。

「和葉、目を閉じろ」

「うん」

あたしは、平次の腕にしがみつきながら ゆっくり歩いた。

光が無いって、怖いね。

こんなにも心細いんやね。

平次が 凄く凄く遠く感じる。

なあ、平次。

さっきおかあちゃんに言った人ってな

隣にいる大好きな人ってな

平次なんやで・・・??

「着いたで!! 和葉、目え開けてや」

「うん」

ゆっくりと目を開けると、段々と何かが見えてきた。

黄色い・・・ひまわり??

「わあ!!」

広大な土地に広がるたっくさんのひまわり。

隣にはひまわり、前にもひまわり。

今、ひまわりに囲まれてる。

「お前のオカンな、ひまわりが好きやったらしいで」

「おかあちゃんが・・・??」

「ああ、オカンから聞いたんや」

そういえば、

おかあちゃんの病室にはいつもひまわりがあった。

おかあちゃんは、ひまわりが好きやったんや。

「ありがとう、平次」

和葉はニツコリ笑った。

平次は頭をポリポリかきながら、和葉に聞く。

「お前の大好きな人って、誰や??」

「へ??」

「さっき、言ってたやん」

やっぱり鈍感やなあ・・・と和葉は呆れたように笑った。

そして、息を吸い込んで

「平次やでっ!!」

やっと言えた・・・

今まで恥ずかしくって、勇気が出なかった。

けど、このひまわりたちが応援してくれてるような気がしたんだ。

「お、俺?」

「うん」

「えええ!!!」

「気づくの遅すぎやで」

「そんな・・・和葉が・・・俺を!」

和葉はくすくす笑いながら、空を見上げた。

寂しい時

辛い時

傍にいてくれる平次が大好きなんやで。

「・・・俺も、好きや」

平次はいつものように笑って、あたしの頬を両手で包む。

あたしはゆっくり目を閉じた。

ドキドキと高鳴る鼓動。

唇が重なった瞬間、涙が出た。

温かい・・・

寂しい時にはキスをして??

辛い時にはキスをして??

あなたの温もりを感じたいから。

k i s s
m e . . .

(後書き)

駄文すいません。

これ、大分初期の話です。

少しだけ書き直したのですが

あまり崩しませんでした。

勝手に和葉のお母さんが亡くなっていることにしてしまいました。

けど、見たことなかったので・・・すいません。

ひまわり。

私もこの花大好きですp(q<□>*◎)

太陽に向かって伸びていくのは素敵ですよね♪

現在短編練習中です。

あまり得意ではないので(連載も得意な訳じゃない)

D i a r yも練習でした。(ぜひ読んで下さい)

評価・感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419c/>

kiss me

2010年10月16日18時59分発行